



日本共産党香川県女性後援会は23日、高松市で白川よう子衆院四国比例候補を招いた女性のつどいを開きました。

オンラインも含め82人が参加するなか、「白川よう子さんと現在の『はて』をトーク」とい

白川氏は、岸田政権が医療・介護を切り捨て、コロナ禍を忘れたような医師数を減らす政策を批判。保育では保育士数を増やし配置基準を変えること。農業では価格保証と所得補償などの必要性をのべ「国民の命と暮らしに関わる予算を削りに削り、軍費に使うことは許されない」と訴え

県女性後援会が つどいを開催

民主香川

定価 月 100円
発行所
民主香川社
高松市藤塚町
3丁目13-14
☎(087)834-7311

シンポ「学校の危機を打開するために」 小畑全労連議長を招いて…県労連主催

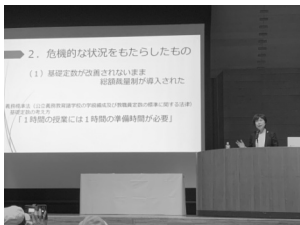
香川県労働組合総連合会
は高松市で29日、小畑雅子全国労働組合総連合議長を招いた「学校の危機を打開するために」と題したシンポジウムを開き、135人が参加しました。

小畑氏は、教職員は長時間過密労働や病休が多く、教職員未配置など「教育に穴が開く」状況の一方、教員採用試験の倍率は、全体平均3・4倍など過去最低だと指摘。

「教育の憲法の教育基本法が大改悪され、教育行政の基本が、『お金を出す口は出さない』か

ら真逆の『お金を出さない』に変えられ、金権腐敗とは無縁で、根本的な解決を主張できる日本共産党を大きくしていきたい」と呼びかけました。

は変えられる。金権腐敗とは無縁で、根本的な解決を主張できる日本共産党を大きくしていきたい」と呼びかけました。



最後に現職教員らによるディスカッションでは「業務上、給食を三分で食べざるをえない」、「人が足りず、年代の構成のバランスが悪い」などの声が出ました。

先日、雨の日の早朝配達途中、一息入れ折に、普段街中では見かけたことのない石碑が眼に入った。高さ2m弱、厚さ20数センチほどの石柱だ。小学校から道を隔てた狭い「子ども広場」の一角に立っている。▼『国旗掲揚台 満州事変5周年記念』『昭和十一年八月十八日 帝国在郷軍人会 〇〇町〇区青年団 大日本国防婦人会〇〇』『発起人〇〇〇〇』などの刻字が読み取れる。

▼「1931年9月18日午後10時20分ごろ関東軍参謀の石原勲、板垣征四郎らの謀略のもとに奉天の東北柳条湖付近の満鉄線レールを関東軍独立守備隊が爆破した。関東軍はこれを中国軍側の仕業として、19日のうちに瀋陽、長春を占領。若槻礼次郎内閣は「不拡大方針」を出したが、24日の声明では関東軍の自衛行為と強調し、その後の軍事侵略を正当化し32年3月傀儡政権『満州国』を造った。この事件は1945年に至る日中15年戦争の発端となった(柳条湖事件『社会科学総合辞典』より)▼私は、この石碑がどのような経過をたどり、戦後79年を経た今日に至っているのか、その詳細は知らない。石碑にある発起人の関係者などを訪ねて歴史を掘り起こしてみたいと思う。これから先150周年記念日など日丸が掲揚されるようなことの無いよう、9条の碑の建設に力を注ぎたいとも思う。

(も)

愚台教太

「アメとムチの政策」とその帰結
19世紀後半に入り、失業や貧困の深化のなかで、熟練労働者が中心だった「自主共済」は立ち行かなくなり、「慈善事業」もまたその限界が明らかになって行ききました。また、「自己責任」の思想に基づく「新救貧法」にも、経済的な仕組みに起因する困窮に対処する機能はありませんでした。一方、社会矛盾の激化と有効な対策の欠如が、労働運動の発展と社会主義思想の高揚へと繋がって行くのを目の当たりにした支配層は危機感を強めました。しかし、「階級」として立ち現われるようになった労働者の運動は、既に弾圧では抑えきれないレベルに達してしました。そのため、自己の実質的な支配権を何とかして維持する必要性に迫られた支配階級が、個々の施策では一定の譲歩をするという戦術に移行することを余儀なくされたのが独占資本主義の時代だったのです。そして、この段階で成立したのが「社会保険」でした。

例えば、世界史でも習ったアメとムチの政策で有名なビスマルクの19世紀ドイツは、1878年に社会主義者鎮圧法を制定したものの、それでは労働運動の高揚や社会主義政党の発展を抑えることは出来ず、疾病保険(1888)、労働者災害保険(1884)、養老年金保険(1891)などを矢継ぎ早に実施せざるを得なくなっていたのです。

総選挙勝利！四国いっせい宣伝行動 日本共産党四国ブロック

白川氏は、戦闘機の生産・輸出など5年で43兆円も戦争する国づくりにと大軍拡につき込む一方、教育や社会保障費を減らす岸田政権の悪政を変えたいと強調。「四国中を毎日駆け巡り、年金や給料は上がらないのに物価高騰で生活が大変という声を多く聞くが、政府は国民

の生活を気にもとめない」と批判しました。

裏金問題で国民の怒りの高まりに追い詰められた岸田政権の対応にふれ、自民、公明、維新が衆院通過させた政治資金規正法改定案の問題点を指摘。「市民と野党の共闘を前進させ、新しい希望の持てる政治を実現しましょう。そのために日本共産党を大きくしてください」とのべました。



「総選挙勝利を」と日本共産党四国ブロックの一斉宣伝が14日、四国各地で行われ、白川よう子衆院四国比例候補は高松市で街頭宣伝をしました。

これからの社会保障を考える 高齢化、人口減少、そして 「大軍拡」の流れの中で ⑬

社会保障のあり方について考える会 準備会 藤井 明

今回から次回にかけては、「独占資本主義の時代に於ける困窮者への社会的対応の特徴」について見て行きたいと思います。

1 自由競争から独占へ
自由競争の時代は、競争そのものによって個別資本の淘汰が急激に進み、株式会社制度の積極的な導入等もあって、生産及び資本の集積・集中が顕著になって行く過程でもありました。その結果、社会の経済構造は、19世紀の後半には、大資本が支配的な力をふるう「独占資本主義」と呼ばれる時代に移行しました。

この時代、働く者の側では、機械化の更なる進展によって未熟練単純労働や女子・年少者の労働の一般化が進み、格差と貧困が急激に進行しました。景気循環も先鋭化し、最初の本格的な「恐慌」と言われる1873年からの不況は、労働者にも多大な困難をもたらしました。

一方、そうした困窮の広がりには必然的に労働運動を高揚させ、英国では、1871年に世界で初めて労働組合の法的地位を認めさせることに成功しました。また、19世紀の後半から20世紀の初頭にかけては、社会主義・共産主義の思想と運動が力を持ち始め、科学的社会主義の創始者たちの活躍が始まった時代でもありました。具体的には、「共産党宣言」(1848)、国際労働者協会(第1インターナショナル)創設(1864)、『資本論』第一巻刊行(1866)、『ドイツ社会主義労働者党』結成(1875)、『資本論』第二巻出版(1885)、『資本論』第三巻出版(1894)、『マルクス』フランスにおける階級闘争(1895年版への序文)(1895)、『なにをなすべきか?』(1902)、『唯物論と経験批判論』(1908)、『帝



2 「社会保険」の成立：
支配権の維持を狙っての

「アメとムチの政策」とその帰結
19世紀後半に入り、失業や貧困の深化のなかで、熟練労働者が中心だった「自主共済」は立ち行かなくなり、「慈善事業」もまたその限界が明らかになって行ききました。また、「自己責任」の思想に基づく「新救貧法」にも、経済的な仕組みに起因する困窮に対処する機能はありませんでした。一方、社会矛盾の激化と有効な対策の欠如が、労働運動の発展と社会主義思想の高揚へと繋がって行くのを目の当たりにした支配層は危機感を強めました。しかし、「階級」として立ち現われるようになった労働者の運動は、既に弾圧では抑えきれないレベルに達してしました。そのため、自己の実質的な支配権を何とかして維持する必要性に迫られた支配階級が、個々の施策では一定の譲歩をするという戦術に移行することを余儀なくされたのが独占資本主義の時代だったのです。そして、この段階で成立したのが「社会保険」でした。

例えば、世界史でも習ったアメとムチの政策で有名なビスマルクの19世紀ドイツは、1878年に社会主義者鎮圧法を制定したものの、それでは労働運動の高揚や社会主義政党の発展を抑えることは出来ず、疾病保険(1888)、労働者災害保険(1884)、養老年金保険(1891)などを矢継ぎ早に実施せざるを得なくなっていたのです。